

東日本大震災被災地〔フクシマ〕訪問 報告書

戸田市「福祉で防災ネットワーク」は災害時に弱い障害者や高齢者で組織されています。平成4年10月23日に起こった中越地震の被災地小千谷市の訪問以来、東日本大震災被災地の宮城県女川市、いわき市、中越地震被災地長岡市山古志村、などを訪問被災地の障害者や社会福祉協議会、ボランティア団体の人たちとの意見交換してまいりました。

この7月やっと居住許可が下りた福島県双葉郡川内村に震災後NPO法人「埼玉キャビネット」から再三ボランティアとして活動してきた山中邦久さんが復興ボランティアとして活動してきた川内村を拠点に葛尾村、飯館村、また二日目には南相馬市松川浦、から海岸線を国道6号線伝いに浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、楡葉町方面を回って震災発生5年後の地震、津波、原発事故の被災地の状況を見、震災直後から、今なお避難生活が続く福島の状況を見、現地の人たちの経験談を聞き、今後いつ起こるかも知れない首都直下型地震や豪雨災害が起こった際に被害の減少に役立つものはないか、学んできたいと思います。

まず現地に詳しい山中さんに計画を立て、頂きました。

計 画 案

日 程 平成28年8月7日（日）、8日（月）1泊2日

午前8時戸田市出発予定（7：00から皆様の自宅近くの集合場所を回ります）

<第1日 8月7日（日）>

戸田市⇒（外環）⇒三郷 IC⇒守谷 PA⇒谷和原 IC⇒常総市（鬼怒川堤防）
9：30 10：00 11：00

現地では、河川氾濫の視察と常総市社協との意見交換という予定でしたが、日曜日で対応できる部署が休みで、各施設も入れないとのこと。被害場所も復旧していて視察の意味も少ないと のことで、車内から河川から水没区域を見る程度になります。

⇒友部サービスエリアで昼食⇒谷和原 IC⇒常磐道⇒中郷SA⇒常陸富岡 IC⇒川内村着
16：00頃予定〈いわなの郷コテージ〉 ※夕食は川内村名物の小松屋旅館、蕎麦酒房「天山で美味しい蕎麦と地酒が楽しめます。

※宿泊のコテージは、バリアフリー1棟。その他3棟。飲食の持ち込みで宴会ができます。お風呂 は高原のいで湯「かわうちの湯（別料金）」もあります。翌日の朝食が時間厳守なので深酒禁止です。

<第2日 8月8日(月)> 7:00 朝食(いわなの郷:時間厳守) 起床は6:00 頃各
コテージの責任者 8:30 周辺散策・炭焼き見学→草野心平巡り(天山文庫)→阿武隈民
芸館、村役場表敬 訪問(村長に面談) テーマは「いまの川内村を考える」 11:00 川内
村社会福祉協議会との意見交換「そのときどう避難したか?」 会場:体験交流館 12:00
昼食いわなの郷レストランで「岩魚定食」 昼食後川内村出発

午後は「フクシマの今を見る」浪江、南相馬をバスで巡る旅

川内村⇒大熊町から国道6号線⇒双葉町⇒浪江町⇒南相馬 13:00 原発20Km 圏内
の現状を実際に見学します。

津波で壊滅状態になった港周辺、時が止まった「無人の街」となった浪江町の商店 街な
どを回る予定です。 ※時間的余裕があれば小名浜からの「いわきディクルーズ」乗船ツア
ー

帰路⇒常磐道⇒関本 PA⇒友部 SA⇒守屋 SA⇒三郷 IC⇒外環⇒戸田西 IC ⇒皆様の家
迄18:00頃最終予定

※原発近くは、国道6号線、常磐自動車道とも区間により下車できないところがありま
すので、概ね車内からの説明、見学になります。 南相馬では原発避難のため、津波被害そ
のままに放置された箇所があり、漁港や海岸部 まで時間があれば見学する予定です。

<資料> www.kawauchimura.jp/ 福島県川内村役場公式ホームページ。
awauchimura.com/ - 川内村観光協会のページ。福島県川内村の総合観光案内。
<http://www.kawauchimura.jp/pdf/map.pdf> 川内村観光マップ(PDF)
<https://www.facebook.com/kawauchinpo/> 川内村 NPO 協働センターの
facebook ページ

お問い合わせは

ふくぼうの清水 080-1062-1367

または今回の企画責任者:

山中 090-3876-3345 メール yamanaka@saigai-v.net

参加者名

浅野保枝、井澤ミツ卫、岡崎郁子、菊地 守、菊地美智子、佐々木浩二、
佐藤順子、清水耕造、玉井満子、中島浩一、中島孝雄、長谷川きよみ、平野 進、
藤倉禎子、山中邦久、山野町子 以上16名

「ふくぼう」被災地巡り

山中邦久

さる8月7日・8日の一泊二日で戸田市の福祉で防災ネットワーク（ふくぼう）の障害者、高齢者の皆様と、昨年鬼怒川決壊で被害の出た常総市を回り、津波被害の小名浜を訪ね、原発避難から帰村宣言をした福島県川内村の現在を巡る旅に出ました。この団体は10年上の活動歴を持ち、市内の福祉避難所での合宿体験や避難設備、防災備蓄の確認などの他に、各地域の避難所を巡り、現地の社協や障害者団体、ボランティア団体との意見交換を行ってきました。



前戸田市議会議長運転のマイクロバスに16名のメンバーと乗り込み、川内村宿泊。そこで2名合流して、福島県の6号線沿岸の復興状況などを視察する予定。

初日の午前中は、茨城県常総市でゲリラ豪雨被害で鬼怒川が氾濫、避難指示が遅れた結果広範囲の災害となってしまった地域を回り、地理的条件が似ている戸田市での状況を話し合いました。昼食を兼ねて小名浜港に

「立ち寄り、昼食後、以前は被災地を紹介していたディリー遊覧船ツアーに乗り込みましたが、基幹産業の要所である港湾はさすがに復旧復興が早く、災害の面影はほとんどありませんでした。夜は、避難解除後、いち早く営業を再開した蕎麦処「天山」で夕食。

2日目は川内村の現状を回り、イワナ定食で昼食。戸田市社協の今井さんや、手話通訳の岸沢さんが電話でお願いしてくれたお陰で福島市から手話通訳の関さんに来ていただき、手話通訳だけでなく、偶然ですが、福島県内での聴覚障害者支援センターの立ち上げや川内村での活動などもお聞き



する機会を得ました。当時、村には聴覚障害者はいないという話でしたが、奥地にたまたま帰村して独り暮らしの聴覚障害の旧住民がいて、何の情報もなく震災後村役場にきたときには村がもぬけの殻だったという話を伺い、一同驚きました。村人が誰もいない村内にたった1人という恐怖はいかばかりだったでしょう。その後、いまでも川内村に出入りして演劇指導などの活動を続けているそうですが、そのボランティア精神には頭が下がりました。

川内村の社協から秋本さんをお願いして、震災直後は事前の協定により隣接する富岡町からの村民の数倍以上の避難民の受け入れ地となった川内村が、落ち着く暇もなく、今度は福島第二原発の爆発事故を受けて、全村民とともに郡山をはじめ埼玉県などにも避難する側になるという貴重な体験談を聞かせていただきました。 帰りの6号線沿いには黒い袋の広大な平原が続いていた。東京電力福島第1原発事故に伴う除染で取り除いた表土や草木を入れた黒い袋が、福島県内の広い範囲で山積みされ、増え続けている。ポリエチレンなどを素材にした「フレコンバッグ」と呼ばれる袋は、いつ最終処分されるのだろう。今度、いつ河川の反乱で流出するか。二次被害が拡大しないことを祈ろう。



旧富岡駅前では今日も除染残土が運び込まれている



川内村 蕎麦酒房 天山にて

川内村社会福祉協議会の秋元さんのお話

○2011年3月11日14時46分地震発生、川内村で震度6弱を観測

◎午後3時15分 川内村災害対策本部設置

◎午後7時03分 東電福島第一原発 緊急事態宣言

震災発生時の3月11日、社協職員は社協運営のデイサービス利用者の家族へ連絡し、全利用者を自宅に送り届けた。

○3月12日

◎（午前5時44分東電第一原発 10K圏内避難指示）

◎12日午前6時50分 富岡町民の避難受け入れを開始、6千人が川内村へ。避難所はすぐ一杯になった。

◎川内村と富岡町の合同災害対策本部が設置された。

◎社協は午前6時に職員全員を招集し、

原発近くの病院が停電になったとのことで、ゆふね施設（川内村の保健・福祉・医療の総合施設）に受け入れ態勢を整えた。しかし午前10時半に車が一台来ただけで、その後なかなか患者が来ない。何万人もの人が避難しているので、道路が渋滞しており救急車が来られる状態ではなかった。

◎（午後3時36分東電福島第一1号機で水素爆発）

◎（午後6時25分東電福島第一原発 半径20～30km圏内避難指示）



秋元氏の話聞くふくぼうの人たち



雪の川内村に避難する富岡町の人々

○13日にはボランティアセンターの運営と、介護サービス利用者の安否確認、サービス中止の連絡のため、利用者宅を訪問趣旨を伝える。

○14日には川内村が屋内退避区域に設定された。物資が届かなくなり、警察はいつの間にか居なくなった。車のない人、歩行が困難な人は取り残された。

社協は、独居・高齢者世帯の要介護弱者の安否確認に入った。

◎（午前11時に福島第一原発3号機で水素爆発、）

◎（午後1時25分 東電福島第一原発の2号機の冷却機能喪失）

しかし、行政からの連絡はなく、報道でこのことを知った。職員は高齢者の安否確認訪問から帰ってきて、初めて知り、若い職員は翌日から出勤せず、職員の間には不安が広がった。

当初は川内村は受け入れる立場だったので、避難者に野菜や食べ物をあげたりしていた。病院には人が大勢集まり、野戦病院のようになり診療所の医師が不在で、浜通りから避難してきた開業医が診察にあたってくれた。医薬品の備蓄が少ないので少量で処方した。

人工透析の患者をいわき市の病院へ搬送を手伝ったりした。
避難している最中に2名の患者が亡くなった。

※ 川内村への避難2日後には色々なトラブルが生じた。食料がない、ガソリンがない、ガス欠車が放置され、二次避難は公共バスで行いました。
他の地域から来た人とのいさかいや、ペットのトラブルもありました。

○15日には川内村にも住民に自主避難指示。

◎（午前11時東電福島第一原発20～30キロ圏内屋内退避指示）

◎（午後1時防災無線で住民に自主避難を促す。）川内村役場も閉鎖された。

社協も会長から職員に避難指示が出た。

若い職員は家族と一緒に避難させ、40～50代は残り、最後の人を二次避難所に送り届けて、社協の事業所を休業とした。

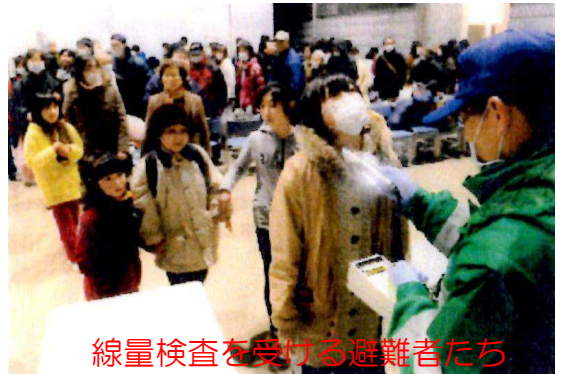
○16日に、川内村・富岡町合同災害対策本部で自主避難決定。避難先は郡山市の「ビッグパレットふくしま」にマイクロバス8台で避難開始し、富岡町1400名、川内村民520名が避難。

避難所ではトイレも食事もままならず、不衛生のためO-157など感染症が蔓延した。

○18日には避難者の名簿作成を開始。頼れる親戚があればそちらに避難するよう勧めた。

○19日には、富岡町・川内村による救護所をビッグパレット内に立ち上げた。

◎ビッグパレットに入るときには、一人一人放射線量を測定された。靴は高めなので没収された。川内はそれほどでもなかったが、浜通りの人が高く、除染のため別の場所へ移動させられた。



※原発近くの病院では、県や市、警察からも連絡がなく、見捨てられたところがあったようだ（『避難弱者』東洋経済新報社）。

二次避難は何千人という人数で、いつまでという期間もわからない。

【質問に答えて】

一人暮らしや障害者手帳所持者は把握できるが、家族がいて災害発生時に高齢者のみという世帯の状況は全然わからない。一時帰宅の状況もわからず、戻ってきてから亡くなった人も多い。震災関連死。

行政は防災無線や集会所への連絡はしていたが、報道の方が早かった。屋内退避を知らずに訪問していて、相手から教えられたりした。親戚が避難させに来て訪問したら居なかったり。安否確認はどんどん状況が変わる。大熊町の受け入れ、ダムが決壊して停電になったと聞いていて、2、3日のことだと思っていたが原発の話は全くなかった。

◎介護保険は避難所では申請に 1 か月もかかり、使い勝手が悪い。

◎この地域には障害者の自立支援は事業所が少ない。

◎制度は縦割りで生活の手伝いがやりにくく、ボランティアでカバーした。

◎飯館村の高齢者施設は、避難のリスクを考えて避難しなかった。しかし、職員のリスクや物資供給が止まるリスクはある。検討しても何が良かったか答えは出ない。



◎備蓄の必要性を考えさせられた。デイサービスには備蓄がなかった。社協にはあったが10～15人分くらい。今では県でも備蓄数を管理している。様々な課題を埋めていきたい。

◎社協は戻ってから高齢者中心に色々な問題解決にあたった。

交通手段がない、病院がない、高齢化に伴う要介護、夫婦で生活していたが一人が入院し生活自体ができなくなったなど。

◎原発事故が再度起きたとき、避難者の受け入れは県レベルでは対応できない。

◎使用済み核燃料はまだたくさんある、ある限り不安はある。核の問題に答えはない。

◎帰村されても高齢者は戻ってくるが、若い人は4～5年たてば避難ではなく移住になってしまい戻ってこない。

◎過疎地の課題が原発事故によって10年くらい加速したように感じる。

目に見える復興はまだまだ。国・県からの支援はあるが長期的に続くとは思えない。

（復興は）その人の人生観にかかわるもの。ふるさとを思って戻ってくる、移住した人が川内村っていいなと思えるよう頑張りたい。

◎原発事故は目に見えない。痛みもない、その怖さはある。原発のある地域はこれを参考に事故が起きないように施策を。いろいろな目で監視してほしい。事故が起きたらすべてが変わります。

岡崎さんのメモから

時間が足りなくなってきた、福島大生のボランティアの不都合もあり、コースの変更することになり、昼食後、私たちのマイクロバスは富岡町に向かいました。

途中川内村中学校に寄りましたが東日本大震災の遺構とするような話もあったようだが、2台の重機により解体中で校舎の内部を見ることも出来ない。

旧富岡駅は駅舎の一部を残し解体され駅近くの踏切に僅かに線路が残り、その先の広い土地には除染で出た廃土や草木を詰めた黒い袋（フレコンバッグ）が幾重にも積み上げられ奥へ延々と連なる。左手には除染残土の一部を覆い隠す白く大きな建屋が見られる。あの建屋の中にもフレコンバッグがうず高く積み上げられているようだ。



線路に沿った舗装道路では高圧洗浄機で舗装道路の表面を洗い流す作業員の姿も見える。

駅近くの町はいくらか片付けられた建物もあるようだが、材木屋の倉庫が地震で崩れかけたまま 5 年半が過ぎた。駅前だけに、真新しいアパートらしい建物が入口の扉も、窓ガラスもなくなったまま、いくつも残されたままだ。津波で押し上げられたのか、町なかに漁船が打ち上げられたまま、放置されているのも見られる。

帰宅困難な町に住む人はほとんど家に帰ることも出来ず、家も手を付けられないで放置されたまゝ 5 年の歳月は過ぎました。2500 人もの方行方不明者の搜索も出来ず、生活の補助はあるといっても不自由な避難所で食べるものだけは間に合わせるだけで、正業にもつせず、まるで鶏小屋か牛舎に繋がれている家畜のように、廃用症候群の進む避難者が今でも増加している。



避難指示解除、「除染も進んだから帰ってもいい」と言われても、除染で掻きとられた汚染した土や刈り取られた草木が黒い袋に入れられたまま、うず高く積みっぱなしになっている故郷へ、誰か帰る気になるだろうか。

かって、この町に住んでいた人たちは 5 年の歳月を避難所生活で、今後これらの町は放射能の除染残土の置き場、原発から出る行き場のない放射性物質の最終処分場となっていくのか先が見えない。

被災地巡りツアーに参加して

聴覚障害者 佐々木浩二

一日目（8月7日）は鬼怒川の水害場所を見学しました。川の様子や被災した家の様子を見て、聾者の立場では、防災無線が聞こえないので、逃げ遅れてしまうのではないかと、不安に思いました。

この日宿泊したのは、川内村のイワナの郷というところ。山奥にある施設で、夜は外灯もなく、真っ暗で階段を登ってコテージに行かなければならず、とても不便なところでした。持参した懐中電灯を照らしながら登りました。私は、足の不自由な清水さんを背負って登って行ったので汗びっしょりになり、本当に大変でした。



障害者のツアーなので、宿泊場所は平らなところが良いと思いました。

次の日の朝は、イワナの塩焼きでおいしい朝食をいただき、草野心平巡り（天山文庫）に車で出かけました。

歩くのが大変な清水さんに頼まれて、酒樽の子供用書庫や池の写真を撮りました。

良い写真だとほめてもらいました。

その後、川内村社協で東日本大震災の時の話を聞きました。

ここでは、手話通訳の依頼が出来、福島からわざわざ通訳者が来てくれたので、皆さんの話が良く分かりました。

福島第一原発の放射能漏れにより、住民が一斉に逃げたので、車が渋滞し動かなくなり、走って逃げたという話でした。ここでも自分のようならう者はスピーカーなどの情報が入らないので大変だと感じました。

二日間のツアーでは、皆さんや手話通訳者にお世話になり、有難うございました。

ガイドブックや災害の資料をもらえて、とても参考になりました。



(手話による読み取り筆記)

視覚障害者 浅野 保枝

東日本大震災被災地訪問に参加させていただきありがとうございました。被災者の対応をされた方々の話を伺いました。

障害者に対する対応ですが、避難させる時は、道路に目印を付けたり、避難所に通路を設けて案内するなど、気遣いが見られ感心いたしました。

自分が障害者であることを理解して貰えるためには、周囲の方にそのことを積極的に伝えることが大事だと思いました。

常総市、東日本大震災被災地視察訪問に参加して MY

鬼怒川の堤防が決壊して早1年、台風も2箇所で大々的に被害が出たニュースをテレビや新聞で知り、1級河川に直接かわりのある戸田市を思う様になりました。

荒川が何時どこで堤防の決壊があるか。誰も予想は出来ない事ですので手のつけようがありません。大掛かりな事は市の方々に任せしておきましょう。

福祉で「防災ネットワーク」では、私達の出来る事として、市内で行われる、防災訓練に参加したり、学校の体育館で避難所宿泊体験や防災施設の見学、災害に遭われた被災地の人達の体験談を聞いたり、交流を深めています。いざと言うときの炊き出しや非常食を利用した料理等を取り入れて1年間の行事計画を遂行しています。

8月には福島の津波と原発被災地に行き社会福祉協議会の代表者との交流会を体験して来ました。それにしても、被災地で実際災害にあわれた方々からじかに聞く話は、新聞テレビなどの報道には出ないことがいっぱいあると思いました。

夕飯を食べた「天山」の社長さんの話ですが、現在川内村で暮らしている人は震災前の約半数くらいとの事ですが、五年半もたってやっと帰宅解除宣言が出たとしても行く先々に除染で出た放射能を含んだ残土や削られた草木が黒い袋に入れられて広々とした畑や空き地に延々と積み上げられたまま放置されているのを見れば、帰りたくとも帰れないのではい

ね。
 私たちは災害発生時に公助。共助。自助。自分たちで出来ることを日頃より心掛け、グループの皆さんとの交流を深めていきます。もし災害が起こった時はお互いに助け合う気持ちさえ持っていれば何とかかなるではないかと思っています。

終わりに

結局、自分だけでは安全な避難所へ逃げることも出来ない、車もない、災害に弱い人たちが取り残されました。地震、津波から難をよけられても、飯館村の高齢者施設のように避難することによるリスクを考え避難しなかった。事実避難中に亡くなった人の数も多く、高齢で体力的にも弱く非難も出来ない、また東洋経済新報社の報道のように原発近くの病院では、県や市、警察からも連絡がなく、見捨てられたところがあったらしい。聞くに耐えられないことも多々ありました。

高齢者介護施設

		所在地	施設名	仮設再開	震災時入所者数	再開施設入居数	再開施設で死亡	避難先で死亡	退所	避難中	避難先				
											特養		老健		病院
											県内	県外	県内	県外	
1	養護	南相馬市	高松ホーム		69	44	17		8						
2		富岡町	東風荘	郡山市	73	35	3	22	10	3	3				
3		田村市	都路まどか荘		50	24	15	11							
4		南相馬市	長寿荘		69	28	16	20	5						
5		南相馬市	福寿園		79	25	19	27	8						
6		南相馬市	竹水園		59	26	12	10	11						
7		南相馬市	万寿園		50	35	7	7	1						
8		南相馬市	梅の香		50			19	31		1	9	13	1	10
9	特養	榎葉町	リリー園		80			42	3	35	1				1
10		富岡町	館山荘		80			44	34	2	43	14			
11		浪江町	オンフル双葉		132			61	14	57	24				3
12		大熊町	サンライトおおくま		80			36	15	29	16		1		
13		双葉町	せんだん		70			36	4	30			2	6	
14		広野町	花ぶさ苑		36	13		9	11						
15		いわき市	翠祥園		85	52	3	18	5	10					
16	経費	南相馬市	ケアハウスさくら荘		27	13	1	1	12						
17		南相馬市	長生院		94	43	9	20	22						
18		南相馬市	厚寿苑		51	11	1	5	34						
19		南相馬市	ヨッピーランド		94				94						
20	老健	浪江町	貴布祢		96	27		28		43	8	29	6		
21		大熊町	ドーヴル双葉		99				99						
22		榎葉町	榎葉ときわ苑	いわき市	80	25	9	28	18						
23		南相馬市	たんぼぼ		9	6	2	1							
24		南相馬市	ヨッピーIV		18				18						
25		南相馬市	小高		16	2			16						
26		富岡町	シニアガーデン	福島市	18	7		8	3						
27		大熊町	クレール双葉		27				27						
28	GH	大熊町	やすらぎの里	会津若松市	9	2		3	4						
29		双葉町	せんだんの家		9	3	1	3	2						
30		浪江町	虹の家		8	5	1		2						
31		川内村	高原の家かわうち	いわき市	16	7	4		5						
32		南相馬市	ホームズくみの郷		16	6	1	3	6						
33		南相馬市	しおさい風の詩		5	1	1		3						
34	有料	南相馬市	やすらぎの里「夢」		14	3	7	2	2						

(資料・票の説明)

避難対象となった高齢者介護施設は34か所、震災時入所者数は1768人、避難先での死亡者は451人。再開施設での死亡者は147人、この他にサービスや民間小規模などの施設がある。知的障害の施設は8か所443人。群馬県や千葉県施設へ避難。環境が変わるとパニックを起こすため、一般の人と同じ避難所は難しい。

纏め

その後も熊本、鳥取と大きな地震が続いて発生し多くの方々が被災し命を奪われた方々にはお悔やみ申し上げます。又怪我をされた方、家屋の全半壊で避難をなされている方々にお見舞い申し上げます。

災害の多い日本では、今までに比較的災害が少ない地域でもいつ大きな災害に見舞われるか知りません。世界でも有数の長寿国と言われる日本ですが、総体的に元気な若い層が少なくなり、私どもも含め高齢でご自身のお身体さえまゝならぬ方も多くなってきています。

この10数年災害被災地にボランティアとして救援に行かれない私達ですが、毎年何か所かの被災地を回り被災なされた方や救助活動に携わった社会福祉協議会また地域の役所の方、被災されながらボランティア活動をなされた方々と話し合い討論してきました。

比較的災害の少ない埼玉県南部で荒川を挟んで東京に隣接する戸田市に住む私達ですが首都直下型地震、東京湾北部地震など近い将来襲われる可能性があると言われていいる。阪神淡路の大震災以来、災害時に弱い障害者や高齢者、今盛んに言われている災害時にご自身のお身体さえ人の支援なしには安全な避難所へさえ行けない人達の命やお身体を守り減災に向けるための調査、研究し、対策を練り、連絡調整をすべく活動を続けてまいりました。

災害発生時には一般の健常者でさえ大変です。自分の体、家族の安否、家屋生活に必要なものの管理、そしてやっと、ご自身の避難、また途中近所の方が困っていれば手を貸して手伝ってあげなければなりません。災害発生時は健常者でさえご自身の身、ご家族の安全を図るだけでも大変です。

しかし、ドコの現場へ行っても避難さえできずに置き去りになるのが高齢者や身障者など災害に弱い人たちです。お年寄りや障害者はより早く避難してください。又、中越地震でもクローズアップされた避難所に入れず、自家用車、テント、いつ余震で壊れるかしのれない自宅で過ごす人々です。市町村の指定した避難所にはほとんど障害者は入っていないというところさ結果が示しています。

自閉症や発達障害で多動性や大声を発するお子さんなど知的障害のあるご家族は一般の方に迷惑をかけてはいけないと避難所には入れず、一般の方に迷惑をかけてはいけないと上記のような避難の仕方をえらぶのです。また目、視覚障害の方は避難混み合った避難所、床にいろいろ物を置かれた避難所では人や物をまたいで歩くことも出来ません、壁際に物を置かない歩ける1メートルほどの通路を作って頂けるだけで車イスの方も視覚に障害を持った方も同じ避難所で生活できるのです。

その避難所はだれが作り運営しているかといえば地域に住む世話役や市町村の住民のはずです。近くに福祉避難所が用意されていないときは体育館以外に教室のいくつかを借りて福祉避難所の代わりに使わせて頂けないでしょうか。

最近の大災害時には長期にわたる避難所生活もふえています。実際阪神淡路の大震災の時でも中越地震の際も後から津波が襲い大きな被害を出した東日本大震災のときでさえ市町村で指定された避難所には障害者の姿は無かったと言われていいます。今、国でも市町村に対して災害時要配慮者の支援には市町村から町会へ町会から班単位での支援体制を整えるべく指導し始めています。避難所も学校の体育館など使う場合、そ

の地域に避難する人の中にどんな配慮が必要な人がいるか、知的障害児を抱えて困っている家族、妊産婦や乳飲み子の多い地域には授乳室、婦人の更衣室ま、また供さんが遊べる場所など学校ならば体育館だけでなくいくつかの教室も貸してもらえるよう頼んでおくとか、福祉避難所の整備が追い付かぬ今その地域のニーズに合う避難所を立ち上げ、運営していくための避難所立ち上げ訓練や運営していく勉強会などもが必要になってくるのではないのでしょうか。避難所生活が長引く時、我慢、我慢では続きません。地震や津波から逃れてもその後の避難生活でエコノミークラス症候群など災害関連死で亡くなる若い人も増えています、大災害からすべての人命を救うことは不可能ですが、あるものを有効に使うことによって減災につなげることは出来るのではないのでしょうか。